



【評者】

倉原 優

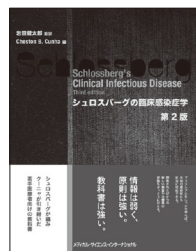
国立病院機構近畿中央胸部
疾患センター/臨床研究セン
ター感染予防研究室長

シュロスバークの臨床感染症学 第2版

Schlossberg's Clinical Infectious Disease,
Third edition

岩田 健太郎 著・監訳

●A4変型 頁1328 2024年9月
定価：25,850円(本体23,500円+税10%)
[ISBN978-4-8157-3117-5] MEDSi刊



総重量2.7kg. このシュロスバークの本の重さである。40代になり筋力も衰えた今、これを片手で持つのは至難の業だ。両手でやさしく扱う。何より、好きな本だから落としたいくない。最近では、医学書の多くがオンラインコンテンツ化されてしまった。たとえそうでなくとも、医学書を裁断してPDF化している医師は多いかもしれない。しかし、私のような中堅医師にはデジタル教科書をうまく使いこなせない頭の硬さがある。文字は画面を拡大すれば見えるが、それだとページの全体像が分からないなどのデメリットがある。そのため、医局の本棚に置いておき、パッと取り出せるスタイルを私は好む。シュロスバークは持ち歩く書籍ではないので、どうしてもそういう本になる。

この本は、疾患としての切り口、病原体としての切り口で縦横にスパスパと感染症が細断されていて、たとえるならサイコロステーキのような食べやすい仕上がりになっている。個々の著者独自の視点もあって、スパイシーであったり素材の味を活かしたり、味変が楽しめる秀逸なパーティ料理といえる。また、図表は重要なポイントにしぼって冗長にならず、写真・図は基本的にフルカラーである。盛り付けもよいというわけだ。日本語の全訳にある程度時間を要しているため、決して最新のエビデン

スが網羅されているわけではないが、含まれている情報は驚愕に値する。感染症学の「辞書」といっても過言ではない。

実は、前版まではタイトルに「Schlossberg's」という文字が冠されていなかった。日本語に翻訳したものには、前版からすでに畏敬の念も込めて「シュロスバークの」と付記されているが、実際はただ単純に『Clinical Infectious Disease (臨床感染症学)』だったのだ。今回、実は英書が初めて『Schlossberg's Clinical Infectious Disease』に変わった。この理由として、シュロスバーク先生が亡くなったことが大きいと思われ、監修を引き継いだクーニャ先生のはからいもあったことだろう。

シュロスバーク先生は、ステージⅣの胃がんによって2019年2月28日に亡くなられている。日本で講演をされた直後であったと聞いている。私は抗酸菌診療の機会が多いが、シュロスバーク先生といえば結核診療のエキスパートでもあった。フィラデルフィアにおいて、難治性結核患者の砦のような存在でもあった。多くの感染症医を生み出した、「近代感染症学の父」ともいえるシュロスバーク先生の人生を映した集大成ともいえる本書を、ぜひ手元に置いていただきたい。

感染症学の父、シュロスバークに哀悼の意を。